

話芸で学ぶ道德教育の教材開発（Ⅱ）

小泉 博明*・稲田 和浩**

【要旨】前稿の「話芸で学ぶ道德教育の教材開発」の理論編を受けて、実践編として中学校の「道德科」教材に適する話芸の代表作として「井戸の茶碗」「徂徠豆腐」を取り上げ、時代背景や資料の解説、学習指導案の具体例を提示した。

1. 話芸で学ぶ道德教育

前稿の「話芸で学ぶ道德教育の教材開発」では、「道德科」の教材となる事例として、三つの演目を簡略に紹介した。本稿では、より具体的に「道德科」の授業で実践できる内容を提示し、検討をする。話芸の演目を通じて、日本の伝統と文化を学び、その内容から道德的な価値も合わせて学ぶことができる。落語家の中でも、三遊亭京楽が「伝統文化を継承し人を活かす、落語の現代的意義」¹⁾という一文で、落語の道德的評価について論じている。話芸を通じて、道德教育のさらなる可能性を発掘していきたい。

2. 井戸の茶碗（細川茶碗屋敷の由来）

「井戸の茶碗」を取り上げる。古典落語の演目「井戸の茶碗」は、講談では「細川茶碗屋敷の由来」といい、浪曲でも演じられる人情噺（武家噺、滑稽噺）である。落語と講談では、登場人物に相違があるが、ここでは古典落語に依拠する。

内容項目は、「C主として集団や社会との関わりに関すること」で、中学校ではC(10)「遵法精神、公德心」、(11)「公正、公平、社会正義」となる。指導の観点は「(10)法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切に、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること」、(11)正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること」である。

主な登場人物は、清兵衛、千代田卜齋^{ぼくさい}、高木佐久左衛門^{さくざえもん}の3人である。清兵衛は屑屋で、江戸時代の現代風に言えばサイクル業者である。また「正直清兵衛」と呼ばれるほどの正直者である。千代田卜齋は裏長屋に住む浪人で、娘がいる。高木佐久左衛門は、細川家家臣で江戸勤番の若い武士である。

噺の舞台であるが、屑屋の清兵衛は麻布茗荷谷に住んでいる。千代田卜齋の住む裏長屋は覚林寺（清正公^{せいしょうこう}）²⁾ 辺り（現港区白金台1丁目）である。高木佐久左衛門は、白金高輪にある肥後熊本藩細川家の下屋敷³⁾に住んでいる。清兵衛は、千代田宅と高木宅を何度も往復することになる。

* 教授／日本思想

** 非常勤講師／日本文化

この舞台は、加藤清正、赤穂事件、肥後細川藩など日本史に関わる場所で、「日本の伝統と文化」を理解する上でも重要である。中学生には、今や赤穂事件や「忠臣蔵」についての基礎知識もないのが現状である。

次にあらすじである。

正直清兵衛と呼ばれる屑屋の清兵衛が、いつものように「屑い、お払い」という掛け声で流し歩いている。清正公近くへ行くと、粗末な着物であるが、上品な器量の良い娘に声を掛けられる。招かれて裏長屋へ行くと、浪人の千代田卜斎から、屑のほかに仏像を引き取ってもらいたいと頼まれる。千代田は昼間こどもを集め素読を指南し、夜は表通りで卜占を生業としているが、風邪をこじらせ、医者に掛かり困窮している。

「ここにある仏像だが、200文で買ってもらえぬか」「え、これですか。大変恥ずかしい話ですが、あたくし目が利かないんです」「なんとか二百文で買ってもらいたい、この通りだ」

清兵衛も困ったが、二百文で引き取り、それ以上で売れたら、儲けを折半することになった。その後、清兵衛は仏像を籠に入れて、「屑い」と掛け声をかけ、目黒白金の細川屋敷の長屋下を通りかかった。すると若い勤番の高木佐久左衛門が「これこれ、屑屋、こちらへ参れ」と、「お前の担いでいる籠の中に仏像のようなものが見えるが」という。この仏像は、仏像の中に小さな仏像がある腹籠りと呼ばれる縁起物である。高木が気に入り、300文で買い上げた。さて、高木がぬるま湯で仏像を磨いていると、台座の下の紙が破れ、中から50両の小判が出てくる。高木は仏像を買ったが、中の50両を買ったのではない。持ち主に返すべきである。そこで、手掛かりとなる清兵衛を捜すべく、長屋を通る屑屋に声を掛け、顔を改めるようになった。

数日後に清兵衛は、高木に呼び止められ、50両のことを聞き、千代田へ50両を届けに行くように依頼された。さて千代田はこの話を聞くと「売った仏像から何が出ようと拙者のものではない。50両は受け取れぬ」と突っぱねる。これ以上言えば無礼討ちにするとまで怒り出す。清兵衛は高木の所へ行くが、こちらも頑として受け取らない。清兵衛は困った挙句に、家主へ相談する。家主は「高木に20両、千代田に20両、清兵衛に10両」の提案をする。高木は納得するが、千代田は納得せず、父の形見として残っていた、いつも使用している古くて洪茶で汚れた茶碗を高木に差し出し受け取ることとなった。これで一件落着となる。

この美談が細川の殿様の耳に入り「茶碗がみたい」と所望する。高木が茶碗をお見せすると、これが何と名器「井戸の茶碗」であることが判明し、300両で買い上げた。またしても高木は清兵衛を呼びつけ、150両を千代田に届けさせた。千代田も、今度ばかりは代わりに渡す物がなく、困り果てた。そこで「もう渡す物もない。独身の高木殿は正直なお方の様だから娘を嫁に差し上げ、結納代の代わりなら受け取る」という。

清兵衛が高木にこの事を伝え「良い娘だから結婚しなさい。今は貧しく、粗末な生活をしているが、高木様の手で磨けば見違えるようになるだろう」という。

すると高木が「いやあ、磨きをかけるのはこりごりだ。また小判が出るといかん」⁴⁾ がオチとなる。

古今亭志ん朝が得意とした噺である。志ん朝と仲の良かった5代目春風亭柳朝に教わったという柳家さん喬は「キレイなおチである。個人的には、卜齋が清兵衛さんに嫁入りの仲介を頼むせりふ〈その方にぜひ橋わたしを願いたいが・・・してはくれぬか〉が好き」⁵⁾という。

なお、「井戸の茶碗」であるが、重要文化財の「井戸茶碗 銘 細川」が、畠山記念館に所蔵されている。

学習指導案(事例)

〇〇中学校 第3学年

1 主題名 「遵法精神、公德心」C(10)・「公正、公平、社会正義」C(11)

2 ねらいと資料名

(1) 武士で無欲で恬淡と生きる千代田卜齋と、同様の高木佐久左衛門との意地の張り合いに対し、町人でありながら侍同士の仲介をする正直者の清兵衛の姿から、正直に誠実に生きる道徳的心情を涵養する。また、三人の生きざまから、誰に対しても正義と公正に基づいた行動が求められていることを学ぶ。

(2) 「井戸の茶碗」(古典落語) または「細川茶碗屋敷の由来」(講談)

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

C(10)「遵法精神、公德心」、(11)「公正、公平、社会正義」

この噺は、心が洗われるような「いい話」である。江戸は麻布に住む屑屋の清兵衛。裏長屋に住む年配の浪人千代田卜齋から仏像を買って若侍の高木佐久左衛門に売ったが、仏像の中から50両という大金が出てくる。高木は仏像を買ったが、「金は買ってない」と千代田に返却しようとする。千代田は「売り物から何が出ようとあずかり知らない」という。行方を巡り、成り行きで仲介に入った清兵衛が右往左往する。身分制の厳しい時代に、町人が侍同士の仲介は本来できないが、清兵衛を人として信頼し評価し、あえて依頼をしているのである。

かつては「誰も見ていなくとも、お天道様が見ている」「お天道様に申し訳がない」と言われた。お天道様とは太陽というよりも、個人の良心を指すものであろう。「天網恢恢疎にして漏らさず」(『老子』第73章)という慣用句もある。

(2) 生徒の実態

社会科「歴史」で江戸時代の庶民の暮らしについて学習していれば、資料の理解は深まるであろう。また「屑屋」というリサイクル業者についても、説明が必要である。さらに、話芸だけではなく、茶道や茶碗という日本文化に興味、関心をもって欲しい。

(3) 資料観

江戸時代は封建社会で身分制がある。江戸の町人は「江戸っ子は五月の鯉の吹流し」というように、短気であり口が悪いが、腹にはわだかまりがなく、執着がないとする。野暮を嫌

い、いき(粹)な生活を楽しもうとする。また、武士たる者は「武士は食わねど高楊枝」と言うように、貧窮を表出せず、清廉潔白を旨とする生き方をする。山鹿素行は、農工商の模範たる「土道」を提唱している。この人情噺から町人、武士の心意気、生き方を考えて欲しい。余談ながら人情噺「文七元結」の長兵衛の心意気も、教材となりうるものであるが、舞台となるのが吉原遊郭のために、躊躇せざるをえない。

4 学習指導

(導入)

落語の噺の登場人物(清兵衛、千代田卜斎、高木佐久左衛門)の関係図とお金の流れ、話の舞台である白金の覚林寺付近の簡単な説明を行う。

(展開)

落語のあらすじを、できる限り会話を活かして理解させる。

清兵衛は、仏像を預かった時に、「もっと仏像を調べておけば50両が手に入ったのに、惜しいことをしたな」と思わなかったのだろうか。

高木佐久左衛門は、仏像を磨いていて内から50両が見つかった時に、「しめしめ、200文で買ったのに50両が出てくるとは、こつは縁起がいいや」と言わなかっただろうか。

千代田卜斎は「わざわざご丁寧にかたじけない。ご返却いただき、ありがたく50両を頂戴する」と言わなかっただろうか。

グループ別に、清兵衛、高木佐久左衛門、千代田卜斎の立場になって、話し合いをする。予想される生徒の反応は、所有権の考え方に立つと、中味を知るとか、知らないに関わらず、千代田から高木へ仏像の所有権が移っているので、高木には50両の返却の義務が生じないのでという意見が出るであろう。

一方の千代田については、浪々の身で家が貧しく、娘もいるのに、片意地を張らずに、有難く50両をいただくべきである。融通が利かない生き方だという意見が出るであろう。

また、清兵衛が二人の間に入り、こき使われて可哀そうであるという意見もあるだろう。清兵衛が、仕事で忙しいのに仲介をする義務はない。人が良すぎるのはという意見である。

ここで大切なのは、人は損得勘定だけで生きているのだろうか。損得勘定を抜きにした生き方とは何かについての議論が必要である。

古代において「清き明き心(清明心)」が重んじられた。嘘偽りなく、何も包み隠さず、つくろい飾るところのない心のことである。後世になると、他者や道理にあるべき態度として、正直や誠が説かれるようになった。三人の行動をみれば、共通するのは、清らかで澄みきった美しい心の持ち主であることが分かる。

(終末)

日々時間に追われ、効率主義を第一とするような現代社会において、お金では買えないものに気付いて欲しい。正直に、誠実に生きるとは「愚直」に生きることでもある。秋霜烈なる言葉も浮かんでくる。日常生活のなかで、どのように公德心を養うかが問われるのであ

る。授業後に「今日の授業で感じたことや、考えたことを書こう。」

5 評価

「遵法精神」「公德心」さらには「公正、公平、社会正義」を身に付けて、道徳的な実践意欲である具体的な道徳行為の身構えができるかを評価する。

(小泉博明)

3. 徂徠豆腐

「^{そらい豆腐}徂徠豆腐」を取り上げる。講談の演目であり、浪曲でも演じられている。

この演目は、江戸中期に活躍した儒学者、荻生徂徠の若き日のエピソードとなっている。人情味に篤い江戸っ子の豆腐屋の親切を描く。江戸っ子の心情の中には困っている時はお互い様という、相互扶助の精神があった。また、徂徠は学者としての信念があり、志をまっとうする強い意思があった。

また、元禄時代の大きな事件として、のちに義太夫、歌舞伎、講談、浪曲、時代小説、映画、テレビドラマで取り上げられる、日本人にとっての知っておくべき重要な古典物語「忠臣蔵」とも関わりを持つ。

内容項目は、「A主として自分自身に関すること」で、中学校ではA(5)「希望と勇気、努力と強い意思」、「B主として人との関わりに関すること」で、中学校では(6)「親切、思いやり」、(7)「感謝」、「C主として集団や社会との関わりに関すること」で、中学校ではC(11)「規則の尊重」、(12)「公正、公平、社会正義」となる。

指導の観点は「(5)より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること」、「(6)思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること」、「(9)友情の尊さを理解して心から信頼できる友達を持ち、互いに励まし合い、高め合うとともに相手のことを思い、「(10)法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること」、「(11)正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること」である。

主な登場人物は、荻生徂徠、七兵衛(豆腐屋の主人)の2人である。他に脇役として、豆腐屋の女房、大工の棟梁、柳沢吉保らが出て来るのに加え、最後の話題の中で、赤穂浪士が登場する。七兵衛は豆腐屋、店舗を構えつつも、朝は天秤棒に桶を担いで、豆腐や油揚げ、納豆などを売り歩く。江戸時代の商売の多くは「棒手ふり」と言って、長屋等に売りに行った。長屋の人たちとのコミュニケーションが重要な職種である。豆腐や納豆は、基本的に肉を食べない江戸時代の人にとっては貴重な蛋白質であり、なくてはならない食べ物の一つだった。

荻生徂徠は断の中でも豆腐について、「栄養があって、骨がなくて食べやすく、冷奴でよし湯豆腐によし、味噌汁の具にもなり、おまけに値段が安い」と述べている。

荻生徂徠は儒者、実在の人物である。柳沢吉保、徳川吉宗の政治顧問のような役に就いた。徂徠を有名にした噺は二つあり、ひとつは赤穂浪士の事件の後、幕府は赤穂浪士の処遇について悩んだ。武士の鑑として賞賛されたが、江戸市中で旗本屋敷を襲撃し、吉良義央はじめその家来たちを殺傷した。今でいうところのテロ行為である。その判断が徂徠に委ねられ、徂徠は「切腹」を提案した。切腹は武士の誇りを保つ死刑である。

もう一つは、同時期の俳人で芭蕉十哲の一人である宝井其角が「梅が香や隣は荻生惣右衛門」と詠んでいる。徂徠の通称が惣右衛門で、茅場町（東京都中央区）で隣に住んでいた。学者で政治に深く関わりながらも、文化人とも交流を持っていた。⁶⁾

噺の舞台は、芝の増上寺（現東京都港区）辺りである。七兵衛は門前に店を構え、近くの長屋に若き日の徂徠は住んでいた。

徂徠が大きく関わる「赤穂事件」であるが、中学生だけではなく、若者は赤穂事件や「忠臣蔵」についての基礎知識がないのが現状である。だが、日本人の常識として、「徂徠豆腐」を学ぶことで我が国の伝統と文化を知ると同時に、尊重する契機になればとも思う。

次にあらすじである。

荻生徂徠は若い頃、世に受け入れられず大変貧乏だった。毎日の食事もままならない。空腹に耐えられなくなった徂徠は、豆腐屋を呼び止めて毎日一個の冷奴を食べて飢えを凌いだ。しかし、その勘定も払えない。

人情味のある豆腐屋の七兵衛は、豆腐の代金は出世払いでよいと言う。さらには、可哀想に思った七兵衛は、明日から握り飯を届けると言うと徂徠は断わる。豆腐は商品だから、今は借りて、後日代金を払えばよい。だが、握り飯をもらえば施しを受けることになる。そこで七兵衛は商品である卯の花（おから）を届けることを約束する。

徂徠の家にはたくさんの書籍があった。七兵衛は書籍を売れば飯くらいは食べられると言うが、徂徠は学者にとって書籍は命よりも大事なもので、手放したら二度と手に入らない書籍ばかりだから売るわけにはいかないと言う。しばらくして、七兵衛は病に倒れる。十日ほど寝込み急いで徂徠の長屋に行くが、徂徠は長屋を引き払った後だった。

その年の暮れに火事が起き、豆腐屋の家は全焼してしまう。しかし、年明け早々、柳沢吉保に認められ出世した徂徠が現われ、卯の花の代金だと豆腐屋の店を建て直してくれる。徂徠はさらに、七兵衛を増上寺出入りの豆腐屋に推薦する。

講談では、多くの演者が手掛ける。浪曲では、故・二代目広沢菊春が手掛け、沢孝子に受け継がれている。

学習指導案(事例)

〇〇中学校 第3学年

1 主題名 「希望と勇気、努力と強い意思」(5)・「親切、思いやり」(6)・「感謝」(7)・「遵法精神、公德心」C(10)・「公正、公平、社会正義」(11)

2 ねらいと資料名

(1) 学者としての信念を貫き、書籍は売らない、一日冷奴一つで空腹に耐え凌ぎ、握り飯をもらっては施しを受けることになるかと拒む、徂徠の生き様を考える。ある意味、わがままなプライドかもしれないが、それを理解して接する七兵衛。そして、無欲に徂徠を助け、卯の花を届ける七兵衛の親切が重要である。さらには、出世した徂徠の七兵衛への恩返しである。

徂徠は世間が忠義を貫いた武士の鑑と賞賛する赤穂浪士に対し、テロ行為として厳しく処断した。それでも赤穂浪士の武士の誇りは尊重し、切腹を提案した徂徠の、誰に対しても正義と公正に基づいた行動が求められていることを学ぶ。

(2) 「徂徠豆腐」(講談)

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

A(5)「希望と勇気、努力と強い意思」、B(6)「親切、思いやり」、(7)「感謝」、C(10)「遵法精神、公德心」、(11)「公正、公平、社会正義」

まず、困っている徂徠を助けようとする七兵衛の親切である。江戸時代は保険も社会保障もなかった。だから、庶民に相互扶助の心が宿った。困っている時はお互い様で、隣近所に対して親切にした。もちろん、出来る範囲でのことだ。

七兵衛は徂徠に卯の花を届けた。卯の花とは、豆腐の絞りカス。醤油で炊けば美味しいが、多くは廃棄せざる得ないものだった。とは言え、商品であり、手間を掛けて料理をした卯の花であるから、親切心がなければ出来ない行為である。また、書籍を売らず、握り飯を拒む徂徠の心情を理解しようと務めたい。学者と豆腐屋で、理解出来ないものはあるのだが、理解しようとした七兵衛の、ただの親切だけではない、深い思いやりを理解したい。

一方の徂徠、学者としての強い信念、そして、出世した後の七兵衛の恩返しである。ただの商人と顧客を越えた、友情に近いものがあったと思われる。

そして、徂徠の赤穂事件との関わり方である。赤穂浪士を武士として尊重する一方、犯罪は犯罪として、そのテロ行為を戒めたのである。

世論は赤穂浪士に同情的であり、彼らの武士道を讃えた。主君の仇討ちを成し遂げた。この時代、仇討ちは合法的であったが、赤穂浪士の場合は非合法的な仇討ちであった。幕府の裁定への異議として吉良義央を殺した、いわばテロ行為なのである。しかも、市中の旗本屋敷が襲撃されて、治安維持の観点からすれば許しがたき行為である。

大名の中にも赤穂浪士の罪を許したのち、自分のところで召抱えたいと言う者もいたが、あえて赤穂浪士に法のもとに切腹という裁断を、徂徠は提案したのである。世論よりも法を

重視した、法令遵守と公正さを、あわせて考えたい。

(2)生徒の実態

社会科「歴史」で江戸時代の庶民の暮らし、武士の倫理観について学習していれば、資料の理解は深まるであろう。また、機会として「忠臣蔵」の物語にも触れる契機になればと思う。

(3)資料観

江戸時代の庶民の相互扶助の精神、そして、「武士は食わねど高楊枝」というような武士の倫理観についても考えたい。江戸時代は身分社会であるため、武士でも、大名は大名、家来は家来、それぞれが決まった生活をしてきたため、実は金銭には無頓着だった。着る物も食べものもだいたい決まっていたので、俸禄に応じた生活をすればよかった。江戸時代も百年が経ち経済の発展により、生活観、倫理観の変化もあった。そうそう、「武士は食わねど」などと言えなくなった時代背景の中で、その信念を貫く武士もいたのだ。

4 学習指導

(導入)

江戸時代の社会システムの説明、萩生徂徠という人物の解説を簡単に行う。

(展開)

講談のあらすじを、できる限り会話を活かして理解させる。

徂徠は何故、貧乏の中、冷奴を食べたのであろうか。他に金銭を得る道（書籍を売るなど）はなかっただろうか。

支払いの出来ない徂徠を、七兵衛は何故許したのか。さらには、握り飯を届けると言ったり、卯の花を届けたりしたのは何故だろうか。

徂徠は何故、握り飯を届けると言った七兵衛の好意を拒んだのだろうか。

赤穂事件について、事件の概要と、赤穂浪士に対しての世間の意見と、徂徠の処断について説明する。グループ別に、徂徠、七兵衛の立場になって、話し合いをする。予想される生徒の反応は、徂徠の行為は食い逃げであり、法令遵守の視点からは許されない。一方で、ホントにお腹がすいていてお金がなかったら、どうしたらいいのか、という問題点もあるだろう（江戸時代は福祉もなく、今みたいに簡単にバイトも出来なかった）。さらには、七兵衛は人が良すぎる。余っているのだから、卯の花をあげて正解などの意見も出るだろう。

徂徠の恩返しについては、いい話と捉えられる。一方、赤穂事件の裁定については意見が分かると同時に、赤穂事件を起こした人たちの心情への理解が困難かもしれない。

ここで大切なのは、相互扶助、親切の意味、ただ施しをするのではなく、相手の立場に立って手を差し伸べるということ。また、他人の意見に左右されず、正しい道を選ぶことの意味を考える。知識として、赤穂事件、忠臣蔵について知る。知った上で、次回の授業の題材に用いる可能性もある。

(終末)

親切は大切であるが、親切の押し売りになってはいけない。よく話を聞き、相手の立場に立つことを考えねばならない。

5 評価

「親切」の意味を知る。相手の立場に立った手の差し伸べ方を学ぶ。「遵法精神」「公德心」さらには「公正、公平、社会正義」を身に付けて、道徳的な実践意欲である具体的な道徳行為の身構えができるかを評価する。(稲田和浩)

4. まとめ

学校現場での授業実践を踏まえ、その成果をフィードバックし、さらなる改善を期する予定であったが、感染症の影響により学校訪問が叶わなかった。今後はリモート授業や、オンデマンドの資料の提供により、何とか打開をしていきたい。一人でも多くの先生に実践していただき、「道徳科」を通じて、日本の伝統文化の話芸を普及していきたい。

注

- 1) 「日本道徳教育学会報」第16号、p.3、平成22年3月10日号
- 2) 「白金の清正公さま」と呼ばれている。加藤清正の位牌や像が祀られている。
- 3) 赤穂事件で、大石内蔵助(良雄)ら17名が、1702(元禄15)年12月14日吉良邸討ち入り後に預けられた屋敷であり、1703(元禄16)年2月4日に切腹した。旧細川邸にはシイ(スタジイ)が東京都指定天然記念物として残っている。
- 4) 落語「井戸の茶碗」の舞台を歩く <http://ginjo.fc2web.com/33idonotyawan/idonotyawan.htm> を参照する。
- 5) 読売新聞、2017(平成29)年9月10日朝刊、「よみほっと日曜版 名言巡礼」
- 6) 講談に『赤穂義士銘々伝 大高源吾』がある。吉良邸討ち入りの前日、大高源吾と宝井其角が両国橋で会おうという設定は歌舞伎でも有名である。大高源吾は、赤穂浪士の一人であるが、俳諧の道にも通じ、号は子葉である。其角が「年の瀬や水の流れと人の身は」と認めると、「明日待たるその宝船」と付けた。

(2020.9.7 受稿, 2020.10.27 受理)